

【研究ノート】

戦前における上越地域への修学旅行―直江津を中心として―

俵木 大知

はじめに

(九月×日)

階下の廊下では、そうぞうしく小学生の修学旅行の群がさわいでいた。

洗面所で顔を洗っていると、

「俺ア鰯をもういっぺん食べてえなア。」

山国の小学生の男の子達が魚の話を楽しげに話していた¹。

これは林芙美子の代表作『放浪記』の一節である。主人公の「私」は、仕事を転々としながら東京を飛び出して直江津にたどり着き、旅館いかやに宿泊した翌朝の描写である。「山国の小学生」とあるのは、長野県や群馬県といった海を持たない近県の小学生と想像される。

現在の修学旅行では、関東や関西方面、さらには海外といった旅行先が選ばれるが、小説にも描写されるように戦前において直江津も修学旅行の旅行先のひとつであった。

本稿では、まず長野県内の小学校が刊行した記念誌を用いながら、「山国の小学生」が戦前に直江津を中心とする上越地域を訪れた修学旅行を概観する。次に修学旅行に行くにあたって作成される「旅のしおり」を手掛かりとして、昭和期の直江津への修学旅行の事例をみる。最後に、修学旅行で直江津に言及している回想に着目し、そのなかから直江津への修学旅行がどのようなものであり、どのように記憶されたのかを探ってみたい。

1、修学旅行で訪れる人々

そもそも修学旅行のはじまりは、明治 19 年 (1886) 2 月の東京師範学校 (現・筑波大学) による長距離遠足にさかのぼるとされ、師範学校や旧制中学校などから徐々に広まっていたという²。

直江津がいつ頃から修学旅行先として選ばれるようになったのは定かではないものの、明治 30 年代には既に長野県内から直江津への修学旅行が行われていたようである³。明治期のある学校の行程では、長野市内で師範学校、県会議事院などを見学して、午前八時二十分

¹ 林芙美子『放浪記』(岩波書店、2014 年：初出 1930 年)、p. 296。

² 竹内秀一「修学旅行の歴史」『運輸と経済』79 巻 6 号 (交通経済研究所、2019 年)。

³ 長野城山学校百年史編集委員会編『長野城山学校百年史』(長野市立城山小学校、1973 年)、p. 334。

に出発し、昼前に直江津に到着。いかや旅館で昼食を取り、午後には日本石油株式会社を見学したのちに海岸へと出かけている⁴。また、国分寺の「五智の如来様」を参詣するという例もみられる⁵。

こうした直江津への修学旅行が行われるようになった背景には、信越本線の開通が大きいと考えられる。明治 19 年（1886）に直江津―関山間が開通し、7 年後の明治 26 年には直江津―高崎間が全通したことにより、長野県からのアクセスが飛躍的に向上している。また、大正期の資料ではあるものの、修学旅行の目的を記した資料によれば、「目的」の第一に「（1）海の観念を得さしむ」ことが挙げられている⁶。つまり、海を知らない児童たちに海を見ることが念頭に置かれ、近県である直江津が選ばれたと考えられるのである。

明治末期から大正期にかけては、直江津に向かう途次に高田に立ち寄る事例が見られ、のちに定着していく。明治 41 年（1908）10 月 28 日に訪れた中沢尋常高等小学校（現・駒ヶ根市立中沢小学校）の「修学旅行記」によれば、「第十三師団兵営ヲ見ルベク本丸ニト向ク、兵器作製部ヨリ師団司令部ヲ右ニ砲兵聯隊ヲ左ニ騎兵聯隊ノ東側ヲ通り呉服町ナル上原方ニ止宿⁷」と、入営直前（入営は同年の 11 月 1 日から開始）の高田を視察している。これは師団設置に際して、長野・松本も候補地として熾烈な誘致活動が展開されたこともあり、第 13 師団の各施設への関心が高かったためだと思われる。大正 11 年（1926）の戸倉尋常高等小学校（現・千曲市立戸倉小学校）の修学旅行でも、「往キノ道順」として「戸倉ヨリ高田迄汽車 高田ヨリ徒歩 歩兵聯隊 高田市 林泉寺 五智、五智清風軒宿泊」と高田に立ち寄って第 13 師団の第 58 連隊歩兵聯隊を見学していることが確認できる⁸。

昭和期に入ると、昭和 10 年（1935）6 月の『高田日報』が、直江津や春日山を修学旅行で訪れた団体は三千余名に上ると報道している⁹。なお、高田にも 8 団体 1060 名が訪れるなど、上越地域にも多くの修学旅行客でにぎわいを見せていたのである。

こうしたにぎわいを見せる一方で、対照的に悲しい出来事も起きている。戦時下の昭和 17 年（1942）9 月 12 日に中箕輪国民学校（現・箕輪町立箕輪中部小学校）が訪れ、春日山城や林泉寺を巡り、五智国分寺や水族館を見学している。一連の見学を終えて宿舎であるつたや旅館に戻り、午後 4 時 30 分ごろに直江津海岸に出たという。海岸で遊んでいた生徒は次第に突堤の方へと歩いていき、そこで突然大波に襲われた。児童 26 名が波にさらわれ、うち 5 名が亡くなるという痛ましい事件もあったのである¹⁰。

⁴ 赤穂小学校百年史編纂委員会編『赤穂小学校百年史』（赤穂小学校百年史刊行会、1972 年）、p. 373。

⁵ 松代小学校編刊『松本学校沿革史』第 1 篇（1953 年）、p. 265。

⁶ 丸子中央小学校百年史編集委員会編『丸子中央小学校百年史』（丸子中央小学校百年史刊行会、1973 年）、p. 390。

⁷ 中沢学校開校百年記念事業実行委員会編刊『中沢小学校百年誌』（1972 年）、p. 378。

⁸ 戸倉小学校沿革史作成委員会編『戸倉小学校沿革史』（戸倉小学校、1967 年）、pp. 178-179。

⁹ 『高田日報』昭和 10 年 6 月 3 日付。

¹⁰ 蓑輪町郷土博物館編刊『もうひとつの遭難』（2015 年）。

その後、戦局の悪化にともなって次第に中止する学校も増加していき、修学旅行が本格的に再開されるのは戦後を迎えてからである。

2、「旅のしおり」に見る修学旅行

ここでは、直江津を訪れた修学旅行生の「旅のしおり」から当時の様子を確認していく。「旅のしおり」は旅行期間における行程や注意事項などが書かれ、旅行においては必須アイテムとなる。しかしながら、残存することは少ない。旅行したのちに学校等の卒業や進学、引っ越しといった節目のタイミングに整理されて処分、または紛失することが多いためである。そうした資料の性格を有しながらも、現存しているのが当館の所蔵している長野県の上田市西校（現・上田市立西小学校）が作成した「直江津修学旅行案内」である。昭和 10 年（1935）に 1 泊 2 日で修学旅行を行った際の記録で、わずか 13 ページ余りではあるものの、戦前期における直江津への修学旅行の一端を明らかにすることができる。

この「旅のしおり」は、縦：12.3 cm、横：6.8 cm で右端をホチキス止めされた小冊子である。表紙には「直江津修学旅行案内 上田市西校 昭和 10 年度」と書かれている。また、海に浮かぶ汽船と帆船が描かれ、旅行先である直江津を髣髴とさせる。海は青色に塗られており、旧蔵者の児童が塗ったものであろう。旧蔵者が見た直江津の海も、のちに述べるように初めて修学旅行で海を見た人々と同様に特別なものだった。旅行中の行程は表紙裏に書かれており、次の通りであった。

【史料 1】

六月九日（日）

午前四時二十分までに上田驛集合

〃 五時〇四分 上田驛発

〃 八時三十五分 春日山驛着

春日山城址、林泉寺、國分寺、郷津油井
を見學し五智清風軒に泊す。

六月十日（月）

午前八時 清風軒出發

直江津町及び水族館見學

午前十一時二十八分 直江津驛着

午後二時二十六分 長野驛着

長野市見學

午後四時五十二分 長野驛発

午後五時五十六分 上田驛着

解 散

（十一日はお休み）

見学地には「春日山城址、林泉寺、國分寺、郷津油井」が挙げられ、春日山から五智へと向かい、直江津で一泊するルートが定番化している。注目されるのは、2 日目に訪れている「水族館」である。この水族館は、昭和 9 年（1934）7 月 21 日にオープンしたばかりの施設であった¹¹。水槽を泳ぐ魚の姿をみた、「山国の小学生」たちにとっては新鮮な体験となったことは想像に難くない。

日程が書かれた次のページには付図として「上田直江津間略図」と題された地図が描かれている。1 ページから 11 ページにわたっては、信越本線の上田から直江津間の名所や旧跡が駅ごとに記されている。高田・直江津の概要は次のように記されている。次節での回想に記されているように、電車や汽車に乗ることも珍しかったことから、車窓から見える風景とともにガイドブックのような役割も果たしたと思われる。

12 ページから 13 ページには修学旅行中の注意事項と持ち物が書かれており、裏表紙は学年とクラス名、氏名が記され、その下に印鑑が押されている。注意事項と持ち物については次の通りであった。

【史料 2】

◎注意事項

一 汽車の注意

- デッキへ出ぬこと。
- 便所へ行く時には先生に申出る
- 凡て先生の指揮によること

二 旅館の注意

- 自分の持物を整頓しておくこと。
- 静かに眠ること。

三 海の注意

- 一人で海へ行ってはならぬ。
- 夜は絶対に行かぬこと。
- 水泳は厳禁。
- 深いところへはいらぬこと。

四 其の他の注意

- 小使銭は二十銭以内
- 副食物は小量。

¹¹ 武石勉「上越市立水族博物館の生い立ち」（『社会科研究紀要』第 55 号、新潟県社会科教育会、2021 年）。なお、水族博物館の設置をめぐる直江津町側の対応については、佐藤和輝「1930 年代日本における個人経営水族館設立と地域社会」（『新潟県立歴史博物館研究紀要』第 22 号、新潟県立歴史博物館、2021 年）が検討している。

○土産物は買ってはいけない。

◎持物（○○には名を書いておくこと）

鼻紙 手拭 新聞紙二枚

歯みがき 雨具 櫛（女）

昼食（握飯…数箇）

今と変わらない注意事項もあるが、「海の注意」に書かれた内容は海を初めて見る児童が嬉しさのあまり、はしゃぎすぎないようにする一種の戒めであろう。また、持ち物もかなり軽量であったことがうかがえる。この修学旅行では土産物を買うことができないなどの制約があったものの、修学旅行で見た風景やそこでの経験は児童たちにとって宝物になったに違いない。

3、回想に見る人々の記憶

ここでは、修学旅行で訪れた人々の回想を見ていき、直江津への修学旅行がどのようなものであり、記憶されたのかを探ってみたい。大正15年（1926）に長野県の川路村（現・飯田市）から修学旅行で訪れた人物は次のように述べている。なお、初日は長野市と善光寺などを巡り、二日目に直江津を訪れている。

【史料3】

高田で下車。徒歩で上杉謙信の居城春日山に登る。（中略）春日山に登って始めて海を見る。水平線近くに船がうかんでいて空も海もすき通るように青く遠くまで続いているのを眺めた時の感激は今も忘れない。夏目漱石の「坊ちゃん」にも出てくる越後の笹飴を頂上の店でわれ先にと買い求める。春日山から五智を経て直江津海岸までやはり徒歩。やがて海岸に出る。「こんぶがあるぞ。」「海の水はやっぱりからいなあ。」「やい、この小さな魚は何ずらなあ。」あっちでもこっちでも大さわざである。小さなフグが波打ちぎわに打ち寄せられている。記念に小石を拾う。浜千代館という海に面した旅館に一泊する¹²。

春日山城の頂上で笹飴が販売されているほか、徒歩で長距離を歩くなど現在の景観や移動手段とは大きく異なっていることが分かる。一方で海を初めて見た感動、そして海と初めてふれ合ったことが長野の児童たちにとって深く胸に刻まれたことが読み取れる。こうしたことは、昭和8年（1932）に訪れた長野県の宮川村（現・茅野市）の児童による、次の回想からもわかる。

【史料4】

¹² 「川路小学校の百年」編集委員会編刊『川路小学校の百年』（1973年）、p.70。

小学校生活六年間で一番楽しかった事といえば、六年の時の二泊三日の長野直江津の修学旅行であった。当時は旅行などする人は殆どなく、汽車に乗る事がどんなに珍しく、うれしかった事か。(中略)二日目は青い、そして広い日本海を生まれて始めて見た事、その青い海に大きな船を見た事、三、四千トン位だったか、貨物船にも乗ってみたこと。海岸で波と遊んで、きれいな海石を拾った事、地引網を引張ってやって、大きなカニを貰ったこと、防波堤で大きな波が来てこわかったこと、楽しかった思い出が一つ一つ思い出される¹³。

山に囲まれた長野県で育ち、修学旅行で汽車に揺られながら訪れた地・直江津。そこで見た、初めての海—日本海の風景と経験は鮮明に、そして色褪せることなくいつまでも児童たちの心に残り続けたのであろう。

さらに、直江津と海に関する回想には、戦時下にあっても海を見たいという児童たちの願いを叶えて何とか海を見せるために奮闘する秋津村(現・飯山市)の教員の思い出からは、「海を見ること」が特別なことであったことが読み取れる。

【史料5】

六年生の修学旅行はその頃直江津と決っていましたが、私達の時は戦争が激しくなり、輸送力の関係で県から汽車使用の許可がありませんでしたが、生徒達は六年生になったら海が見られると楽しみにしていましたので、校長先生に許可を戴いて直江津まで歩いて行く事になりました。受け持ち二人ていねいな下検分を重ねました。

朝三時半出発。ちょうちんのあかりで点呼をとり、富倉峠で夜が明け、長沢までの長い道をてくてくと歩き、長沢から下検分の時に頼んでおいたトラックに新井まで乗せてもらい、新井から直江津までは又単調な道を海を見たい一心で歩き歩かせた日の事が今もなおあざやかな思い出となって残っています¹⁴。

戦局が悪化し、交通事情が厳しくなるなかでも学校長からの許可を取り付けて、直江津へ海を見るために下見に下見を重ねる教員の努力がうかがえる。そして、引率者として生徒たちを励まして「歩き、歩かせた」長い長い徒歩の末にたどり着いた先にあった、直江津の海を見た感動を次のように締めくくっている。

【史料6】

先生も、生徒も、へとへとになって行きついた直江津の海は、丁度長い夏の日の太陽が沈

¹³ 宮川小学校開校百周年記念事業沿革史委員会編『宮川小学校の歩み』(宮川小学校開校百周年記念事業推進委員会、1973年)、p. 87。

¹⁴ 秋津学校百歳誌編集委員会編『秋津学校百歳誌』(秋津学校創立百周年記念事業推進委員会、1974年)、p. 194。

む所でした。広い広い大海原の水平線に金波銀波を残して沈んで行く夕焼の日本海を一生忘れることはないでしょう¹⁵。

おわりに

本稿では、まず戦前に修学旅行で直江津を中心とする上越地域を訪れた長野県の事例を学校の記念誌を手掛かりに概観した。明治 30 年代には直江津への修学旅行が行われ、大正に時代が変わるころには高田へ立ち寄って陸軍関連施設を見学するようになった。昭和期には大勢の修学旅行客で上越地域もにぎわいをみせるものの、戦時下では次第に下火となり、再開は戦後を待つことになる。次に、「旅のしおり」を参考にしながら、当時の修学旅行の事例を紹介した。最後に、回想のなかから直江津への修学旅行がどのようなものであり、記憶されたのかについて確認した。「山国の小学生」にとって、初めての汽車での長距離移動、初めて見る海の景色は、思い出としてずっと残り続ける特別なものだったのである。

戦後には子ども連れの海水浴客で直江津の海は活況を呈している。こうした活況のなかには修学旅行で訪れた子供たちが成長し、一般家庭にも普及しはじめた自動車に乗って、今度は親となって直江津の海を再訪したのかもしれない。

一方で修学旅行客を受け入れた直江津を中心とする上越地域側の資料や視点が不足しているのは否めない。また、上越地域を訪れたのは長野県のみならず、ほかの近県からの修学旅行客の存在も十分に考えられる。複数の視点から描かれる立体的な上越地域への修学旅行像を描くことを今後の課題としたい。

(上越市立歴史博物館 学芸員)

¹⁵ 前掲注 14。